

いにおける重なり合い」を希求する権利は原理的に残され、その実現には「寛容」が要件となろう。

科学と宗教とが扱う領域の相異について

沖 永 宜 司

科学と宗教とは、同じ領域の事柄について、両者ともがそれぞれ異なった見解を表明することによって対立する。それに対して、科学と宗教とは扱われる事柄の領域が異なり、したがって両者の対立が原理的には不成立である、という考えをここでは取り上げたい。

その第一には、科学の領域を現象世界の領域、宗教の領域を形而上学の領域として、それらの領域区別を考える立場がある。この宗教の領域の問いには、「世界がなぜあるか」などにも見られるように、テスト不可能という共通した性質がある。さらにこの領域は、科学的知識が拡大した場合でも、必ず科学の説明をメタな位置から説明しなおすことができることを特徴とする。たとえば厳格な生物学上の自然選択論者が同時に敬虔な信者であり得る理由はこれであり、それは宗教において、神的な力や原因の観念を確保させる試みの中で用いられてきた構造でもある。それは、世界全体に関する信念の根拠は世界の中に見出せないという、テスト不可能領域が永久に存続する構造をも示している。

第二は、自然的事実とそれを容れる規範やコンテキストとは不可分であり、両者ともを実在と見なす立場である。この立場は、自然は無意味で無価値であり、意味や価値とは事実に対して主観的に付与される非実在に過ぎないという考えをも、主観的価値評価のひとつとして見なす。もし徹底的に事実のみが実在であれば、「価値がない」という価値判断さえも意味を持たないからである。つまり、自然の事実だけでは自然からの価値剥奪さえできないはずだが、この剥奪を行っていることがまさに、事実と価値判断との不可分性を示している。そしてこの判断は科学ではなく、科学を形作る生の営為であり、その生とは科学的事実には不可欠であることによって、実在性を確保する。こう考えると逆に、純粹な自然とは、自然「主義」的世界でも、宗教的理念が描く世界でもないことになる。

第三に、宗教の領域を形而上学的な真理が定立する以前に見る立場が考えられる。この領域は、世界の根源に関する言説さえをも成立させている場所を形成する。これは科学の言説に宗教の言説を対置させるのではなく、両者の対立構造そのものを切り崩してゆくことである。それは機械的自然の無意味に対して、目的的な有意義を対置する立場でさえない、根源的な生の立場である。反対に形而上学的な言説によって世界に意味付与しようとする態度の方が、特定のプラグマティックな目的のために、生から抽象された意味連関に組み込まれている。したがって生への帰趨としての形而上学的言説の切り崩しは、言説以前に位置し、存在者とはならない。したがって、それは前二者のように究極的な知としてさえ、設定できない。むしろ形而上

第1部会

学以前の形而上学として示されるものである。

第四に、世界の無意味を徹底させることを通じて、形而上学以前の領域に至る立場が考えられる。これは機械的決定論や目的論という言説化された知識以前に戻る点では第三の立場にも共通する。しかし第三の立場は、言説化されない一方で、当初から意味や価値の根源としての生の意義を肯定するのに対して、第四の立場は意味の不在から出発し、この否定的状態を徹底させることを通じて、無意味を無効にする所にまで至る。そこでは否定が徹底されることで、否定自身が意味を失って肯定に転化する。それは無意味を無意味として成立させている根拠の無効化であり、逆にこの無意味を作り出す態度は、現象世界を矛盾にしかさせないことを指摘するものである。それは意味のない現象世界とは別に、意味ある形而上学的世界を見出すのではなく、現象する世界を無意味として一貫させることの自己崩壊の彼方に、宗教を見出す立場である。これは超越的な観念もなく、生の営みさえ自然化された世界における超越の次元の、ある種の積極的な形態だと考えられる。

日本における公共宗教(論)の射程

新矢 昌 昭

本報告は、公共宗教論を検討し、日本での公共宗教の可能性について論じるものである。公共宗教とは、近年、宗教が「私

事化」に向かうのではなく積極的に公共領域で影響をもっている現状を指す用語である。しかし、公共宗教論には大きな疑問がある。それは公共領域に対して何故宗教なのか、ということである。そこで現在の公共宗教論の内在的な矛盾点に焦点を当て、日本の公共宗教の可能性を問いたい。

公共領域に対する宗教の社会的な貢献についての提言は様々にある。例えば、J・カサノヴァによると、現在の宗教は「脱私事化」している。世界中の宗教が公共領域に参入し、政治的な論争となっているが、それは宗教の伝統を援護するためだけではなく、私的領域と公共領域の間、システムと生活世界の間、個人と社会の間、国民と国家と文明と世界システムなどの間に、「近代的な境界線を定める闘争そのものに参加するためである」という。そして、公共宗教の類型を「国家レベル」「政治社会レベル」「市民社会レベル」とし、「市民社会レベル」の公共宗教が望ましいという(『近代世界の公共宗教』)。このように、公共領域に対する宗教の期待が高まっているといえる。しかし、ここに根本的な疑問が生じる。それは公共領域に対して何故宗教なのか、という意味や役割である。この意味や役割の一つとして宗教間対話にみられる「公共善」が挙げられている。例えば、平和、福祉、公正、そして、それを成り立たせる他者への配慮、個人の責任、徳性などである(山脇直司「公共哲学と宗教間対話」)。しかし、それでも何故宗教なのかは依然として疑問である。

更に、公共宗教には「信教の自由」の問題が関連している。何故ならば、この前提を守らなければ宗教は公共宗教として活